

第7回:古文書の絵

キーワード: 絵入り本、錦絵、挿絵



ぐすーよー、あさゆさーや、いふえーしくないびーたしが、なーだあちさいびーんやーさい!
(みなさま、朝夕は、少しずつ暑くなって参りましたが、まだ暑いですね!). 今月は、古文書の絵についてのお話です。読んでね〜!

●絵本の歴史

絵が載っている本(絵入り本)の歴史は、古くは平安時代の貴族を読者とした絵巻物にまで遡ります。時代が下ると、絵入り本(挿絵入りの本)として大衆化に支持されるようになりました。近世(安土桃山〜江戸時代)に木版の技術が確立されると、出版を生業とする人々が出現、絵師による浮世絵(風俗画)の発達を促します。江戸後期になると、木版技術を取り入れた多色刷りの美しい本が多数刊行されました。現存する絵入り本は、貴重な古書や美術品として、世界中の愛好家を魅了し続けています。



資料A: 琉球大学附属図書館蔵「琉球人行列図 錦絵」(1832年刊行)



資料B: 琉球大学附属図書館蔵『新鐫 椿説弓張月』(滝沢馬琴著 葛飾北斎挿絵 1811年)

●絵入り本の種類

絵入り本には様々な種類がありますが、代表的なものをいくつか紹介します。資料Aは、本の挿絵をルーツとする錦絵(多色刷りの浮世絵木版画)。天保3年(1832)、尚育王就任の謝恩使(豊見城王子)一行が江戸へのぼった様子を描いたものです。資料Bは読本(よみほん)の例で、滝沢馬琴の『新鐫 椿説弓張月』(1811年刊行)です。最後は挿絵の例。資料Cは伊波普猷文庫所蔵『琉球年代記』の中の「琉球雑話十一(図)」(より紹介しました。

古文書にみる絵は、本(和書)の発達と密接にかかわっていたことを、ほんの少しご紹介しました。楽しんでいただけたでしょうか? 次回の「どう〜ちゅいむにい〜」もどうぞお楽しみに! (NK)

参考文献: 国立国会図書館「楽しむ」『国立国会図書館開館60周年記念貴重書展 学ぶ・集う・楽しむ』第3部 (web版) 2008/「絵本」『日本大百科全書3ニッポニカ』小学館 2001



琉球人の行列を
みたいかた、こ
こからどうぞ!



資料C: 琉球大学附属図書館・伊波普猷文庫蔵 太田南畝(おた・なんぼ)『琉球年代記』琉球雑話十一(二八三年)